

あごら

MINI

<58号>

1982年2月10日発行 ¥100 円40

- 何でも言える●何でも書けるミニ雑誌<あごらミニ>
- 小さな<ひろば>=AGORA・<あごら>
- あなたの声を待ってます。みんなでつくる<あごら>

美しく老いる

福井浅子

春の野に喜々として戯れている幼な子も、成人し、やがて老いを迎えます。

これは誰にも、まぬがれることのできない人生の道程なのに、いざ老いの季節を目の前にすると、人びとは、老いの年月をいかに生きるか、という切実な問題に迫られて、当惑します。

老いは、思想・信条・職業・性別にかかわらず訪れます。誰もが、いつかは老いるものと知りながら、つい齢を重ねてしまったというのが、ごく自然な実感でしょう。だからといって、ただ手をこまねいて老いを待つてはいられないのも、また人情です。それならば、いたずらに右往左往せず、進んで老いを迎える準備をしてはどうでしょう。

ボーヴォワールは、その作品『老い』のなかで、老人になるということは、いかに美しく老いるかであるといっています。人はそれぞれ若い時代から、自らの人生を大切に思いながら、何十年も、日々の生活をとおして、精一杯、人生の尊い一駒一駒を刻

み込んでいます。それはその人にとって、かけがえない人生であり、また美しい歴史です。老いの時代は、その美しい個人史の一頁であるとともに、人生における、特殊性ある一時代でもあります。

ある人は額に刻まれたしわを数えて、失われた美貌を惜しみ嘆くかもしれません。けれども、しわはまた、美しい老いの年輪でもあります。化粧をし、着飾り、美食を追ったとしても、考え方や行動がしっかりしていなければ、とうてい美しい生き方はできないでしょう。老人は豊かな経験と成熟した思考力を身につけ、衰えゆく健康を守り、友と手をたずさえて、今在る社会を、老人にとって、より幸福に生きられる社会に変革する努力を傾けながら、自己のしっかりとした人生設計をたてて、実行するならば、満ち足りた幸せな老いの時代を送ることができるといえる。

——美しく老いるとは、美しく生きぬくことだ——
——と思うのです。

今月のなかみ

<編集担当・あごら京王>

表紙のことは	美しく老いる………	福井浅子	1
随想	私にとっての老いとは………		2
アピール	高橋倭子／嶋田ゆかり／川野慶子／関和子／斎藤千代		5
お知らせ	国連軍縮特別総会に3000万人の署名を………		
情報	反戦へ向けて各婦人団体も統一行動の動き、ほか		
	知らないうちに戦争に巻きこまれまい………北村三和子		7
	82年度活動方針と『あごら』10周年記念行事………		
	女のつどい・女の講座………		8

『あごら』創刊10周年
記念論文募集!!

1972年2月創刊の『あごら』10周年を記念して下記のとおり記念論文を募集します。ふろっでご応募ください。

テーマ

『基本的人権としての女性解放』
女性差別は基本的人権の侵害であることを理論的に裏づけるもの。法律・経済・社会など、どの面からのアプローチでもかまいませんが、新鮮な視点を持ち、十分な説得力のある、筆者独自の「論」を期待します。

締切り 82年8月31日（消印有効）

枚数 四百字30枚前後（千字以内の概要をつけること）

選者 天野正子／大脇雅子／久場禧子／高良留美子／駒尺喜美／中村智子／水田珠枝／山下智恵子及びあごらV責任者

送付先 〒160東京都新宿区新宿1-9-6 あごら論文係

発表 『あごら』27号（82年12月刊）に掲載の予定

賞金 入選 10万円
佳作 3万円

佳作 3万円

あごら京王

私にとって「老い」とは

人が老いるということは、自らの問題であるだけでなく、周りの人びと、特に周りの女たちにとっても深刻な問題です。老人介護は女の仕事と宿命づけられている日本の社会の中で、私たち<あごら京王>は、自他の老いを考えつつけてきましたが……。

すべての老人に 「見苦しくない運命」を

高橋 優子

ある日、鏡に向かって、拭いようのないしわを発見した時のショック。それを「老化事始」に、招かれざる客は、みどりの黒髪に、よく見えたはずの眼にと、理不尽にも訪れ続けて、私はゆらいだ。そしていつか、その訪れに寛容になり、たじろがなくなっている自分に気がついた。気がつけばもう五十代――。

同年輩が集まると、そろそろ老後の話題が出るようになった。
「とにかく体をもうり鍛えて、病気にならないようにしよう。入院なんてことになったらもうお手上げだもの。差額ベッド、付添看護費と、ささやかな貯蓄がたちまち底をつくのは目に見えている。家族にも大きな負担をかける。だから元気に生ききって、ある日ポックリ消えたい」というのが異口同音の願いである。
「ポックリ消えたい」なんて、なんとなくつましい願いだらう。この素朴な言葉の中に、実は、この国の老人医療保障や介護の問題が集約されていると思う。

* 罹病率は六十代でぐんと増えるという。医療保険の十割給付を受けられる間は、働き盛りで医保のお世話になることは少ないのに、定年後から七十歳・老人医療保障までの、罹病率の高くなる時期に、自己負担無料の医療保険が使えなく

なるのが現実だ。その上、七十歳を越えても、所得制限や扶養義務者の所得制限（それも信じ難いほど低額）があるので、おいそれと病気になることはできない。この医療保険の不合理を見直すことが是非必要なのではないか。

国民健康保険や政府管掌の医療保険は赤字だというけれど、一方には黒字の医療もあって、豪華な保養所やレクリエーション施設にあり余るお金をかけていると聞く。そこで私は思う。現在、八種に分かれ、保険料の負担率も、給付率もまちまちである医療保険を、一本化することはできないものかと。それによって老人の医療費も補えるのではないか。それでもなお不足するようなら、老人医療費は社会保障として、国費（税金）で負担したらよいと思う。また、差額ベッドや付添看護費も、是非医療保障に含めてほしい。さもなければ本当の医療保障とはいえないと思う。

* 介護の問題も、殊に女にとっては大きな問題だ。老人の介護者はほとんど妻か嫁、または娘なのだから。親をみとるために止むを得ず職場を捨てる例も多いという。もちろん、親をみとめることは義務というより人間的な愛情の自然であり、一番望ましいことには違いないけれど、

働く女が自分の力をフルに生かして社会に寄与するために、社会的な介護の支えも必要なのではないか。また主婦専業の人にとっても、老人の介護は心身ともに大変な重労働である。長年寝たきりだった高齢のお姑さんと、そのお姑さんをもとった五十代か六十代のお嫁さんの死亡広告が並んでいるのを見て、胸が痛んだ記憶がある。介護する主婦だけでなく、家族もみなまきこまれて大変な犠牲をしいられる事態も珍しくない。それでは、みとられるほうも心安らかでいられるはずはない。ホームヘルパー制度の充実や、介護者の年休（もちろん、夫なり息子も含めて）の考慮などが切望される。

* 医療保険と共に、老人福祉のもう一本の柱である年金保険についても、大変問題があるようだ。とりわけ、官民格差のひどさ。支給開始年齢（国家公務員共済年金は五五歳、厚生年金は六〇歳）、支給金額（平均、一か月三万円の差）の差だけでなく、支給制限（共済は現在なし、五七年六月から年収六百万円以上に若干の減額。厚生は六〇～六四歳で月収十五万五千円以上あれば全額カット）、国庫負担（共済は一〇〇万人に対して四七〇五億円。厚生は二五〇〇万人に対して六六四六億円）等、その差のひどさは言語道断と言ってよいほどだ。これを先ず正すべきだと思う。さらに、「老人問題は婦人問題」といわれるほどの年金の女性差別もなくさねばならない。（これは年金だけでなく、その算定の基準となる給与の差別をなくすことからしなければな

らないが。年金も医療と共に、すつきりと一本化して、一人一年金、せめて憲法にうたわれている基本的人権が守られるほどの金額であってほしい。決して無理な希いではないと思う。行政改革を、良心的に賢明に断行して、湯水のような税金の無駄遣いをなくせば、である。

ついでに言わせてもらえば、制度を簡素化して、医療も年金もすべて、税金一本にまとめて、合理的に配分するようにしたらどうか。国家公務員の場合のように。そうすれば公務員の数もぐっと少なくてすむし、効率的だと思う。

“老い”について

嶋田 ゆかり

高齢者問題というのは私にとってずっと、老人の問題でしかなかった。私一人、若人一人と、全く別の範疇に属する人。老人。私は常に若い人であり、老人は過去も未来も老人という錯覚。そして、その老人をどうするか、老人にどうしてやるのかという視点しかもたない考え。しかし最近、両親に老いを感じたり、年長の友人たちとの話や、勉強会に参加したりするうちに、もしかして、これは私の問題なのではないかと思ひだしてきた。

老いというのは、若さの延長線上にある人間の生の一過程であって、“老人にどうしてやるのか”といった他人の話ではなく、自分をどうするかということ

「すべての国民に対して見苦しくない運命を保証することを至上命令と考える」北欧三国のようなお手本もある。福祉国家への努力はせずに、そのマイナスポイントばかりあげつらって、老人問題も「家庭基盤充実政策」の中に埋没させようとしているかにみえる今のゆき方は、明らかに逆行だと思ふ。行政改革、軍拡反対とセツトで、すべての老人に「見苦しくない運命を保証する」福祉国家をつくり上げるよう、働きかけなければと考えている。私たちの社会が、人権無視・棄老の破廉恥をおかさないように。

とはななかったのか。若くて健康な男子を基準につくられているこの社会の中で、老いて、若い人よりは病気になる可能性の高い身体で、そして女である私は、どうやって、その人間の一過程を通ろうとしているのか。

政府は福祉から後退する時、精神主義を声高に論じる。三世代同居のメリット、家庭の大切さを説き、すべてを個人的なレベルに押し込めて、個々の中での解決を促す。そこに描き出されるのは、嫁ぐ夫、家を守り、子を育て、老人の世話をする妻、という従来の性別役割分担を再確認したうえで成り立つ家族の姿である。そしてまた、扶養される者を負の存

在とみなし、どう言葉を使い換えようとも、生産性のみに価値を置いてゆく社会の姿ではないだろうか。老後に向けて、自己鍛錬、心の支えとなりあえる仲間づくりを自分に課すと同時に、食べてゆけない部分を食べさせる

「老い」ということば

川野 慶子

「老人」という表現がある。このことばからは、年金問題や老人ホーム等、社会的・制度的な事柄が第一に頭に浮かぶ。

しかし、「老い」と表現した場合、それは必ずしも制度上の問題を想起させない。笑いジワではない、年輪としてのシワが深く刻み込まれ、人生の重みに腰が曲がり、白髪、総入歯になり、ついには人生の深みに足をとられ、恍惚の人となる。どうにも、元気で明るく自由闊達な様子を思い描く気にはさせないものが、「老い」ということばにはある。そして、きわめて個人的なレベルにおしとどめてしまふようなニュアンスが含まれているようだ。

人生三十年にも満たない私にとって、いまだ「老い」とは、実感しにくい異次元の問題である。が、いつかはその影がしのび寄り、スッポリとこの身を包み込んでしまふのであろう。

以前、読んだ真経伸彦氏の小説の中に、こんな文章があった。「冷却と闘いつつ、最後には冷却して

といった老齢保障の根底に流れる救済、救済の感覚を問い直したい。老いは負でも正でもなく、老齢保障というのは、あらゆる人間に当然保障されるべき人権保障なのではないだろうか。

消え失せる炎——それが生命現象」まさにそのとおりなのだろうと思う。いいえて妙、と思う。

自然の摂理にしたがい、冷却して消え失せることが絶対の前提条件と知りつつも、人はやはり「老い」をわが身の問題と捉えたくない、捉えたがらない。

老いていくのは、とても恐ろしいことだし、実に切なく哀しいことなのだ。しかし、それは自然の掟ではあるけれど、ただ若いゆえのエネルギーばかりが人生なのではないから救われる。

外見的な老化現象より、内的老化現象が怖いと思うのだ。内的エネルギーが磨耗し、若い感性が枯渇してしまうことを考えると、「あわれで孤独な老後」というコピーと一致してしまふ。

「老い」の対語は「若さ」だが、精神的な若さ、柔軟性は、年齢的に若い頃から培っていかねばならないものだろう。至難の業と想像できる。

実感できないまでも、やがてはわが身にふりかかる。「心して生きよ」と、自

身にいいきかせてみる。すでに年齢の物理的な堆積に戸惑っている現在、やはり予想できなくもないところにいるらしいことに気づく。

冷静し消え失せることを冷静に受け止め、なおかつ、それにどこまで反逆しつづけられるものなのだろうか？

夢の全国老人大会へ

関 和子

夢は大きなほうが良い。新聞の切り抜きを見ているうちに、私の夢は熟成されていった。高齢化社会問題は皆、嫌でも応でもかわりのあることである。生まれた時から老いに向かって生きている。しかも日本は西欧諸国に例のない早い速度（フランスの五倍、スウェーデンの三倍）で高齢化社会へと移行している。国の最重要課題といってよい。

大蔵省の国家予算の割りふりの都合で福祉額が減少する。そんな施策を大衆運動で流れを変えられないものだろうか。婦人四八団体は勿論のこと、労働組合、各党の地方組織、福祉団体、町会組織でさえ加わる。団体代表はこれまで代表をしたことのない新鮮な感覚をもった人で構成され、各地区ごとに高齢化社会への提案を討議する。そのほかに住民票により無作為で抽出し、市町村単位で集会を重ね県代表とする。各代表は討論された提案を持ち寄り全国大会を開催する。現在、五六年の厚生行政基礎調査によ

「老い」を陰湿なものとしないうために、今から仲間づくり。福祉充実の展望がない現在、仲間の存在が大きくかわってきそうな、われわれの将来だと思う。

「老い」ということは私の受けとめ方は、実に個人的で抽象的な域を脱しないようだ。

ると、高齢者世帯は前年より四・七％増え全世帯の七％に達した。四軒に一軒の割で六五歳以上の老人がいる世帯となった。将来、人口問題研究所の推計だと二七年後に人口増加のピークがきて、四・五人に一人の老人となり、生産年齢人口の三人で一人の老人を支える高齢化社会となる。

朝日新聞の十二月十一日付署名記事で「わが国の老人対策は項目では西欧諸国に見劣りしないが、その対象はほとんどが貧困層に限られ、中流老人には年金と医療費の無料化以外は見るべき福祉施策がない」とある。そして中央社会福祉審議会が厚相に当面の在宅老人福祉対策のあり方について、三つの骨子での具申を解説していた。

このように高齢化社会問題は我々に身近な事柄ゆえに、大衆の意見を政府の施策に反映できないものだろうか。

米国で十年に一度、各州から二千人余の代表を集め、ホワイトハウス老年会議

が開かれる。今回は昨年十二月催された。二年越しの準備をし、延べ一万回を超す地方集会を積み上げての全国集会はこれで三回目だ。一九六一年会議の成果は老人保険法、七一年会議は老人基本法の発展と充実をもたらした。

国民共通の課題がある時、国民各層の意見をくみ上げ、最も賢明な政策をとり定めよう、そして国民的合意にもとづいた努力をしようとのホワイトハウスのねらいだそう。代表は政策に反論し、提案をもち寄り、今回は六百の提案が採択された。各代表は六百余の方策を持ち帰る。反論と支持が郵便を通じて各地からワシントンに寄せられる。上・下院での審議のあと将来の有効な施策と同意につながるという。約十五億円の予算を投じての国民各層の声をききこまかく聞こうとするわけだ。

英国の指導者たちが最近予想と大きく反した結果が出て衝撃を受けているという。万年落選候補の当選、反核運動の盛り上がり、労働争議のスト回避等、皆、指導者の予想に反したものだ。英国の指導者、知識人の発想の根底には一種の衆愚論がひそんでいるが、既成の政党幹部や

運動家達の固定した考え方では、人々の行動原理がつかめず世界の動向も見極められない。

指導者に必要なことは、人々の不安や恐怖を人間の当然の本能的防衛を生む要素と、しっかりとらえ、それを除去する方策を真剣に考える態度である。と朝日新聞、八座標Vにヨーロッパ総局長が書いている。

日本の場合政治体制が異なるとは言わない。政府が天の声と云うのは誰の声だろうか。戦艦機一機の購入費用で大衆の発想が、声が聞けるのである。私たちには政府を批判する自由がまだであると信ずる。

福祉削減策、年金額のスライド延長、医療費の自己負担、福祉サービスの利用者負担等、各層の人々が当面している問題を、諮問機関からの意見具申だけでなく、冒頭に提案した全国大会の方策を受け入れる体制が出来得ないだろうか。そうすれば、たとえば費用の自己負担も納得出来る。各人各層で構成した全国大会で政策を提案する。それを政府は政策に取り込む、と言うのは私の白昼夢かも知れない。

定 年

斎藤 千代

その話を聞いたとき、心の中がスーッと寒くなっていた。ひとごとではないと思った。

ある高名な女性ライターが、最近とみ

に筆力が衰えているという。往年にもましてびえわたった筆がデスクを驚かせることもある反面、書き手に内緒でそっと書き直さなければならぬものもふえ

た。それを、いつ、どのように伝えればいいのか、みんなが愛しているその人だけに悩んでいるのだと。

ずつと前になるが、榊原さんを見んたビューしたとき、遠からず現場の仕事からは引退するつもりだと、ひそかに決意を語られるのを聞いた。名だたる先輩たちの事故。その事故の真因に気づかない先輩たち。「ちょっととした指先のふる

えでも、心臓の手術は生命にかかわりますからね——世界に聞こえたこの名手が、声を低めて語られたときの表情を忘れることはできない。榊原さんは、みんなに驚かれる若さで現場を去られ、惜しまれる若さで、この世からも姿を消された。

五五歳とか六〇歳で定年とは、残酷な制度だと私は思う。ものとはこんな姿を

国連軍縮特別総会に

3000万人の署名を！

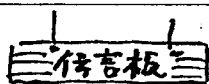
キナクさい臭いが世界中にたちこめかけているなか、この6月、第2回国連軍縮特別総会がニューヨークで開かれます。核爆弾の体験国ニッポンは、この機会にぜひとも反核非戦を訴えようと、原水禁、原水協など反核団体とともに、全国の婦人団体も署名を集め、3000万署名を達成して国連に届ける予定です。

△四八団体Vに参加している△あごらVも、署名とカンパを集め、私たちの反戦の意思表示をしたいと思ひます。署名用紙をお届けしますので、ぜひ署名運動を。そして事務局までお届けください。

反戦へ向けて

各婦人団体も統一行動の動き

この機会に反戦平和運動を女の側からさらに積極的に盛り上げよう、従来バラ



●「男も女も育児時間を」連絡会

パンフができました。定価三百円。送料一括二百円。申込みは、東京都中野区江古田4-17-14 ますの方 TEL 03-3855-2293

●婦人民主クラブより

「婦人民主新聞」の縮刷版ができました。二月末日まで申し込んだ場合三八〇〇〇円の廉価で、それ以降は四〇〇〇〇円です。問い合わせは、03-4402-3238まで。

していたのかと、人がようやくくおぼろげながらもそれが見えかけたときには、五〇の坂をすぎているのではないだろうか。『女ざかり』を五〇歳で書いたボーヴォワールの思いが心に沁みる。

私たちのBOCは、「職員は、その望む期間働き続けることができる」と、定年制を社則で否定している。それが最も人間的なことだと考えたからだし、少なくとも私たちの仲間なら、その日々を

バラだった各団体の運動を全国規模の国民運動に結集しようという動きも出、1月27日、48団体が懇談会を持ち、27団体50名が活発に討論しました。3・21広島20万人集会、5月東京50万人集会に女たちはどうかかわるか、まず3月8日の国際婦人デーに統一行動を、という提案が出されましたが、基本線は一致しながらも残念ながらその場では結論が出ず、2月3日に再討議されることになりました。戦争への足音が近づいてきたいま、党派や主義、主張を超えて、反核、非戦に向けて、私たちの決意を行動で示していきたいものです。

戦争への道を許さない女たちの会

2月15日経験交流集会

5月にはシンポジウムを

△女たちの会Vができて1年余、各地にもいろいろな△女たちの会Vができました。その現状、経験の中から学んだものなどを語り伝え合う会を、2月15日(月)6時半から、東京・水道橋の全水道会館で持ちます。

自分で決める英知と勇気をもっているにちがいないと信じているからでもある。人は死の瞬間まで自分に責任を持つ、とは、私たちの不文律だが、しかし、責任を持つことをある日突然不可能にする老いを、どのように識別できるのだろうか。

知らぬ間に また一匹や 冬の蠅

荷風の匂がなぜか思い出されてならないこのごろである。

また、「安保をやめれば日本に対するアメリカの介入が強まる」など、巷間の説に対し、どう理論武装していくか、学習会的なシンポジウムを、5月23日(予定)に開こうと準備をすすめています。12・7集会の記録をまとめ、活動報告にする計画もあります。手伝える方は、ご連絡ください。

国連での現地アピール参加希望者は

至急事務局までご連絡を

ニューヨークでのアピールには、日本から約10000人が参加する予定です。が、私たち自身の署名簿をもって参加したいという方がいらっしやいましたら、△あごら事務局Vまで至急ご連絡ください。

6月5日出発、7日国連でアピール、8、9両日、NGOと政府の対話集会、10日、世界各国からの署名提出、17、18日はハワイでの南太平洋非核化集会に出席の予定。費用は総額60〜65万円を自己負担することになります(出席者のワケがありますので、希望者全員が参加できるかどうかはわかりませんが)。

82年・あこら10周年・飛躍の年！

あなたの一番たいせつな方を一人あこらVの会員・誌友に誘ってください

82年度のあこらV活動方針は、「雑誌『あこら』の発行を軸とする反戦平和、差別撤廃の情報活動を推し進めるとともに、それに拠る運動体としての側面を強化する」に決まったことは、1月の『ミニ』でお知らせしたとおりですが、1月24日の運営会議で、その具体案を討議しました。

まず『あこら』を続刊できる資金体制を確立しよう

あこらVの活動の中心は、何と云っても雑誌『あこら』の発行にあります。この費用の約1/3は会費でまかなわれていますが、現在の会員数は800人弱。せめてこの2倍にしなければ続刊がむずかしい状況です。ここの具体的な活動のひとつとして、それぞれの会員が、身近な人を1人、会員（または誌友）に誘うことを実行しませんか。女性週刊誌の読者が毎週300万を超えているニッポン。せめてその500分の1の読者を確保したいものですが。

◆会費・誌代は前金制です。

ヨロシク！

あなたが送ってくださる会費、誌友費は、女の情報活動を支える貴重な財源です。諸物価高騰の折ですが、ぜひ前金で

お願いします。

なお、1月26日現在、82年度分会費は、総額148万2321円、249人の方からすでにお送りいただきました（数字が半ばなのは、年度途中までの方もいるため）。年2回の『あこら』を出すのに650万、『あこらミニ』に年間150万が必要です。誌代をお送り頂くことが何よりも続刊の助けになります。

◆ありがとうございます！

今年度分基金すでに17万突破

この1月5日から26日までに基金は、43人の方から17万3000円頂きました。どんなに勇気づけられたかわかりません。お送り下さった方々のことは、「これが私にとっての女性解放運動です」をありがたくかみしめ、女による女の情報活動を続けたいと思います。

◆図書館活動もさっそく始めました

1月号『ミニ』を読んで、さっそく近所の図書館を回られたSさんから、申込書のコピーが送られてきました。「図書館の新規雑誌の決定は2月、この」と、ご注意ください。女の問題がクローズアップされている今、全国の図書館に『あこら』が常備されるとうれいすね。地域の方からの申し込みがあると、図書館側でも考慮するようです。

反戦運動、差別撤廃の活動を
毎号の『ミニ』に掲載

ここのメインテーマ、反戦平和・差別撤廃のための活動の中心は、もちろん『あこら』に拠る情報活動ですが、毎号の『ミニ』にも、関連記事を必ずのせることにしました。各地でご活躍の方、どしどしご寄稿ください。

また、集会デモ等は、昨年に引き続き戦争への道を許さない女たちの会Vや八八団体Vと共闘します。

拠点間交流を活発に

全国13拠点の活動は、着実に続けられています。模索中のところもまだあるようです。ここのテーマのひとつは、拠点活動の活性化。隣接拠点交流会を持ちたいもの。また全国大会行事のひとつとして、拠点会議も計画しています。10周年記念行事を兼ねて、各拠点をめぐる巡回講演会も考えられますが……。

運営会議は年4回、
各地で公開します

4月11日（月）名古屋、夏、全国大会会場。11月21日（月）京都で開きます。傍聴、提案大歓迎ですが、会場の都合もあります。

すので、傍聴希望の方は事前に事務局までお申し込みください。

夏は10周年記念全国大会、
共に笑おう！

ダバろう！ 遊ぼう！

2月で満10周年ですが、全国大会は7月31日（土）8月1日（日）の両日、東京で開きます。いつもマジメすぎるあこらV、前夜祭は底ぬけにユカイにたのしく。2日目は講演会（基本的人権としての女性解放）と分科会で心ゆくまで語り合う予定。企画担当はあこらジュニアV。この指とまれ方式の実行委員に参加する方は、左記にご連絡を。

TEL 933-5204（夜9時以降）
東 由美子

既刊『あこら』複製版
会員に限り特価販売

複製の希望の多い、創刊号、8号、9号、10号、11号、15号などを含めて、複製し、既刊『あこら』1〜23号揃いのセット販売をします。総額1万6380円のところ、会員で、予約申し込みの方に限り1万3千円に。送料はサービス。

あこらVの歌募集！

入選作に藤井恵美さんの陶箱10周年を記念してあこらVの歌を。審査は全国大会当日、自作自演（または

今回の「MINI」担当、年末年始のあわただしさの中、気がついたらもう締切りで、またさらないままに送って、事務局の方にはずいぶん迷惑をかけてしまった。準備不足もあり、今回の担当はちよつと早計だったかという思いも残る。次の機会に乞うご期待！

(中)

<女のつどい・女の講座>

日	時	テ	マ	会	場
2月9日(火)	昼14:00~ 夜18:40~ 18:00~	「水俣の国・物語」上映会 0422-44-0364 (同映画武蔵野三鷹上映実行委) 市民サロン「戦後36年は何であったか」(日本はこれでいいのか市民連合)		武蔵野公会堂ホール	連絡先 03-352-2784
10日(水)	19:30~	緑のふるさと・2月例会 谷川俊太郎、新島淳良		新島私塾 (03-323-4348)	
11日(土)	13:00~17:00 昼14:00~ 夜18:00~	私はこう思う——新聞の家庭婦人欄を読んでの話し合い 市川房枝の生涯 「八十七歳の青春」上映会 主催 (財)婦選会館、日本婦人有権者同盟、桜映画社		渋谷勤労福祉会館 03-354-2543(藤村)	渋谷東横劇場 問い合わせ 03-342-5768 (鈴木)
12日(金)	18:30~	総括集会継続討論会 (国際婦人年をきっかけとして行動を起こす会)		ジョキ 03-357-9565	
13日(土)		男女家庭科共修問題を考える 講師 高木柴子		福岡市婦人会館	
14日(日)	昼から 13:30~17:00	男の子育てを考える会・例会 03-385-2293 (増野潔)		場所未定	
15日(月)	18:00~ 18:30~	あごら浦和・例会 “結婚”を考える 戦争への道を許さない女たちの交流集会 03-816-2057 (小川)		浦和コミュニティセンター	
17日(水)	18:30~21:00	あごら北東京・例会 「エコロジーとフェミニズムについて」の討論会 ——ミニ編集に向けて		全水道会館5階会議室 婦人協同法律事務所	
18日(木)	13:30~15:30	アジアの女たちの会・女大学 「靖国をささえるもの」話 山口明子、 五島昌子、内海愛子 参加費500円		渋谷勤労福祉会館	あごら読書室 03-354-9014
19日(金)	18:30~21:00	公開講演会「来たるべき高齢化社会」講師 前田大作、松山美保子、 増田光吉、東浦めぐみ(司会)		国立婦人教育会館 0493-62-6711	東武東上線武蔵嵐山駅下車
21日(日)	19:30~	あごら26号編集会議② あごら九州・例会 あごら京都・例会 女の生き方を考える 講師 高橋ますみ 問い合わせ 03-936-6746(柴洋子)		あごら読書室	
22日(月)	19:00~21:00	あごら京王・例会		シャンバラ 秦野公民館	調布市役所婦人教室 0424-88-5111
23日(火)	18:00~ 18:00~20:00 18:00~21:00	市民サロン「市民運動の表現を考える」(日本はこれでいいのか市民連合) 働く女性の自覚とは 講師 斎藤千代 結婚の意味を問う継続討論 03-354-2543 (藤村)		川越勤労福祉事務所 0492-42-1800	渋谷勤労福祉会館
25日(木)	10:00~12:30	あごら東海・例会		名古屋婦人会館	
27日(土)	13:30~ 19:00~	あごら旭川・例会 あごら武蔵野・例会		場所未定 かわら版事務所 0423-94-2902	
28日(日)	12:00~16:00	あごら柏・例会		柏市旭町近隣センター	
3月1日(月)	18:00~21:00	反核=反原発「反核太平洋の日」3.1東京集会 03-815-1648 自主講座		一ッ橋日本教育会館 8F	
4日(木)	18:30~21:00	あごら26号編集会議③		あごら読書室	
6日(土)		あごら九州・例会			
8日(月)		国際婦人デー、統一反戦行動			
9日(火)	14:00~16:00	公開講演会「フランス女性の意識と生活」講師エヴリコ・シュルロ女史		国立婦人教育会館 (600名定員)	
10日(水)	19:30~	緑のふるさと・3月例会 林 都		新島私塾	
14日(日)	13:30~17:00	あごら浦和・例会 “結婚”を考える		浦和コミュニティセンター	
17日(日)	18:30~21:00	アジアの女たちの会・女大学 「ふたたび“女”は家に」——家庭基盤 充実政策を問う話 庄野夏子		渋谷勤労福祉会館	
19日(金)	18:30~21:00	あごら26号編集会議④		あごら読書室	
21日(日)		反核・軍縮20万人集会			

各地のあごら連絡先

あごら旭川	旭川市神楽岡1条5丁目3 田代慶子 0166-6551237
あごら札幌	札幌市西區琴似1条6丁目グランドハイッ琴似 408号 細田英理子 011-66442927
あごら仙台	仙台市青山1-13-14 三船照子 022-22912712
あごら浦和	浦和市南浦和2-19-8 国井マツ江 0488-877136
あごら柏	柏市豊四季台3-1-6 古賀節子 0471-4511677
あごら北東京	豊島区東池袋1-45-11 メゾン金子202 03-9855411
あごら武蔵野	小平市小川町1-7-6 丹羽雅代 0423-343763
あごら京王	調布市仙川町3-12-32 福井浅子 03-3088771
あごら神奈川	川崎市多摩区東生田2-2-12 森山方沼田千恵子 044-4933300
あごら東海	愛知県愛知郡東郷町和合ヶ丘1-12-6 伊藤汎美 0561-3139922
あごら京都	京都市左京区北白川久保田町36-4 塚崎美和子 075-7911462
あごら大阪	茨木市西駅前町10-3 遠藤由美 072-612310
あごら九州	福岡市西区笹丘2-4-2 小島豊子 092-5521176